

そのいち

六月一日。

カーテンの隙間から漏れる太陽の光で、目が覚めた。時計を見ると午前六時半。目覚ましが鳴る前に起きたのは何日振り：いや、何ヶ月振りかな？

なんだか、物凄く楽しい夢を見ていた気がするけど、内容は起きたとたん忘れた。

いつもと変わらぬ朝：変わったといえば今日から衣替えで、夏服になることくらいだ。

私は夏服をしばらく眺めた後、「またあとでね」と囁き、一階の洗面所へ。と、そこには先客の姿が。私のお母さんだ。洗い終わった洗濯物をカゴに入れて、今から干しに行くらしい。朝からご苦労様です。

「お母さん、おはよう」

私の挨拶に驚いたように振り向き、

「あら！もうそんな時間？まだ六時半だと思ってたんだけど：急いで朝ごはん作らなきゃ！」

いえ六時半であってますよ、お母さん：しかしその言い方はあんまりじゃなろうか？それじゃあ私がいつも寝坊してるみたいに関こえる。私だってたまには早く起きるっての！

半年に一回くらいだけ：

「うーん：今日は雨が降りそうね：いえ、もしかしたら雪が降るかも！」

「六月に雪が降るなら私も見てみたいわ！」

母の言葉にツツコミつつ、洗濯物に目をやった。

「いつも、こんな早くから洗濯してるの？」

「いいえ、いつもは那美が出て行ってからしてるんだけどね。今日は今からお洗濯しておかないと、このあとちよつと出来そうにないから。あ、朝ごはんはこれを干した後すぐに作るからちよつと待っててね」

そう言うと、洗濯カゴを重そうに抱えながら物干しへ向かって行った。半分くらい持ってあげた方がよかったかな？

「今洗濯しておかないと出来ないって：どこかに出掛けるのかな？」

ちよつと疑問に思ったけど、「まあいいや」と、大して気にはとめなかった。

洗面所での用事を済ませ、台所へやってきた私は、冷蔵庫から牛乳を取り出しコップに注いで一気に飲み干した。でも実を言うとあんまり牛乳は得意ではない。では何故飲むのか。それは切実な問題を私は抱えているからだ。もう少し大きくなりたいのだ！身長ではなく、胸が。その一念で始めた毎日の牛乳なんだけど：ふう：

「い：いや、諦めるな！きつと大丈夫！そのうち効果が現れるはず！」

そもそも牛乳が胸に効果があるのかわからない。だけど、その効果を信じて飲み続けている私のこの努力もわかってほしい！誰にとって？他でもない、私の胸に！頼むよ！ホント！

コップを流し台に置いて、テレビのリモコンに手を伸ばした。この時間なら朝の情報番組で天気予報と、今日の運勢が見られるはずだ。

「いつも寝てて見られないから、早起きしたときくらい運勢をチェックしておかなきゃね。」

椅子に座って、テレビをつけるとちょうど星占いのコーナーだった。そういえばこの番組の司会のお姉さんを見るのも本当に久しぶりだ。ご無沙汰してます。

なんて、心の中で挨拶していると、お姉さんがご褒美とばかりにハッピーなお言葉を私にプレゼントしてくれた。

『今日の一位は射手座のあなた！素敵な出会いと新鮮な驚きが待っているかも？』

「わ！やった！射手座、一位？すごい！今日の私って最高かも！」

十二月三日生まれの、真正正銘の射手座の私。上々の占いの結果にテンションが上がらないわけが無い。最下位になった星座の人に、このテンションをお裾分けしてあげたい。

『続いて、今日のお天気です。各地の天気はご覧のとおりです』

占いが終わり、お姉さんが今日の天気を伝える。どうやら今日は一日晴れのようだ。

「ん……？」

映し出される画面を見て、少し違和感を覚えた。今日の天気にはない。画面の上に表示されている『天気予言』の文字にだ。

「天気：予言？『予言』ってなに？普通、『予報』じゃないの？」

疑問を抱きながら『天気予言』なるものを見続け、そして考えた。はーん、もしかしたらこの『天気予言』というのは、この番組独特の洒落を利かせた表現なんだな。お姉さん、結構やるじゃない！腕上げたね！うんうんと頷いていると、

『それでは次に、今日の予測魔法量をお伝えします』

聞き慣れない言葉が耳に飛び込んできた。

「……………は？」

時が止まってしまったかのように、その場に固まる。

『天気予言』に『魔法量』？この司会のお姉さんはまじめな顔して何を言ってるの？こんな変なことを真面目に伝えるなんて…そうか！これはあれだ！子供達にもわかりやすく伝えるための演出なんだ！うん！きつとそうだ！そうに違いな！さすがだね、お姉さん！

「お待たせ。遅くなっちゃったわね」

「うひえっ！」

「あら、驚かせちゃった？ごめんなさいね」



「冷蔵庫やテレビ、洗濯機や照明。そういう装置は全部『魔力機関』で動いてるでしょ？だから魔法量が少ないと止まっちゃうのよ。まあ冷蔵庫や照明は、大型の『魔力機関』が搭載されている大丈夫だけど、洗濯機はよく止まっちゃうのよね」

それを聞いて、冷蔵庫の裏側を覗く。そこに当然あるはずの電源コードがない。次はテレビの裏を見る。やはり電源コードはない。それどころか、壁にあるはずのコンセントの差込み口すらない。テレビのリモコンも、電池ではなく、『魔力機関』らしい。

愕然とした。夢じゃないかと、頬もつねってみた。痛い。夢じゃない。

どうしてこうなったかはわからない。けれど世界は私の知らぬ間に、

『魔法世界になっていた』

ここで「やった！万歳！」とか言える人は私の敵です。グーで殴ってやる。

私はよろめきながら近くの椅子に腰掛け、片手を顔に当て俯いた。心配そうに寄ってきたお母さんをもう片方の手で制して、「大丈夫」と言い、水を一杯くれるように頼んだ。

なんで：どうして：？『魔法世界』って：ありえないでしょ！電化製品は魔力で動く魔力製品？魔力で動くなら電気代もかからないからいいよね。夏もエアコン使い放題？エコの時代に贅沢だね。でも洗濯機はちょっと欠陥品かも：いや！問題はそこではなく！

ブンブンと頭を振る。

どうするの？どうしたらいいの？私どうやったら戻れるの？い：いや：落ち着こう。今はちよつと落ち着こう。深呼吸して、まずは水を一杯：

一息ついてから水の入ったコップを手に取り、朝食を作っているお母さんの後ろ姿を見ながら水を口に含むと、

「ぶぼっ？」

飲み込む前に噴き出してしまった。ありえないものを見てしまったからだ。料理をするお母さんの側にある、全長十センチくらいのネズミのぬいぐるみ。そのぬいぐるみが顔を真っ赤にして、口から必死に火を吹き続けている。これこそ珍獣だ。

「お：母さん：？それ：なに？」

「それって：ああ、クーちゃんのこと？何って：うちの使い魔じゃない。この子、那美が子供の頃どこから拾ってきたのよね。もう家に来て十年になるかしら？早いものねえ。あ、クーちゃん、ちよつと火が強いわ。焦げちゃう」

私があんな珍獣を拾ってきた？確かに子供の頃、あれに似たぬいぐるみを拾ったような覚えはうつつらとあるけど。でもそのぬいぐるみ、いつの間にか無くなっていたし、もちろん生きて、動いて、火を吹いていた、なんてことはなかった。

「さすが『魔法世界』：ぬいぐるみも動き出しちゃうんだね：」

苦笑いしながら頼杖をついて、ぬいぐるみのことをあらためて見てみた。一生懸命火を吹く姿はとてもかわいい。何と言うか、ほっこりとした気持ちになる。

なんでこうなつて、どうやったら戻れるのかわかんないけど、頑張ってるぬいぐるみの姿を見てたら、とりあえずこの世界を楽しんでみるのも悪くないかも：なんて思えてきたから不思議だ。

そうこうしているうちに朝食が出来上がってきた。ご飯に、卵焼きに、焼き鮭に、味噌汁。『魔法世界』といえども、朝の定番メニューに変わりはないみたい。イモリの丸焼きとか出てくるんじゃないかと思っただけで一安心。

朝食を済ませ、着替えるために自室へと戻った。真新しい夏服を手に持ち、体にあてがって全身を写せる大きな鏡の前でクルクルと回ってみる。

「やっぱりいいね。夏服♪絶対こっちの方がかわいいよね♪」

「半袖になつて、ラインの色が赤から黄色になっただけじゃない」（母親談）なんて意見は一切受け付けません。誰がなんと言おうと、夏服最強なんです。

私はササッと着替えを済ませ、

「よし！それじゃあちよつと『魔法世界』の生活でも楽しんでみますか！」

鼻歌を歌いながら自室を出て、玄関へと向かう。

『魔法世界』、まだ戸惑いはあるけど、ちよつと楽しそう！元の世界に戻るまでこの世界を満喫してやろう！

：なんて気持ちも、玄関を出て半歩ですつ飛んだ。

「いつてきまー：す？」

玄関を出たとたん、空を飛ぶ大きな影とともに、もの凄い突風に襲われ、折角セットした髪をクシャクシャにされてしまった。恨みの目線を空にやると、そこには全長十メートルはあるう、巨大な鳥が何羽も飛び交っていた。

あまりにも非常識なその光景を見て、もう笑うしかなかった。

学校に行く途中、あの巨鳥のような非常識な生き物と出会わないかと、辺りを見回しながら登校した。幸いなことに、通学路には怪物は居なかった。どうやらあの鳥は通勤用の乗用鳥らしい。通学途中の生徒が、「乗用鳥に風で髪を乱された」などと愚痴を言っているのを聞いてそのことを知った。

それにしても皆も被害にあってるんだね。乗用鳥反対！の横断幕をもってデモ行進でもしてみようか。行政も通学路上空の乗用鳥を禁止してくれるかもしれない。

ところで、辺りを見回していて気付いたことがある。それはあの鳥以外に非常識なものはない。そして道路には車は走っているものの、圧倒的に少ない。どうやら車に乗る人より、乗用

鳥に乗る人の方が多いようだ。

「でも温暖化防止にはいいかも。車も『魔力機関』で動いてるみたいだし」

問題はあの鳥が出す糞だよね…かけられないよう注意しないと。そういえば、雨でもないのに傘を差してる子がさつき居たな。もしかしたらあれは鳥の糞避けだったのかもしれないな。そんなことを考えている内に、学校へと到着した。見た感じ元の世界の学校とどこも変わった様子はない。

下駄箱から上履きを取り出して履き替え、教室へ。

でも、私の足は教室の前でピタリと止る。一抹の不安が過ぎったからだ。

「もしクラスの人が全員違ったらどうしよう…そうだったら私誰の名前もわかんないし絶対怪しまれちゃうよね…記憶喪失だって、病院に連れてかれちゃうかも…」

大の病院嫌いの私には、それは耐えられない。それだけは勘弁してほしい。病院に連れて行かれるくらいなら、牛乳十リットル一気飲みしたほうが百倍マシだ。

私は数分、教室の前で考え、祈るような気持ちで教室を覗いてみた。

不安は杞憂に終わった。

クラスの人は皆、見知った顔ばかりだった。向こうも私のことを知っていて、「おはよう」と挨拶もしてくれる。世界は変わってしまったとしても、クラスメイトは変わらなかった。

「は…よかったあ…」

私は心底ほっとして、そのまま自分の席へ向かった。

席につくと、梢ちゃんもすぐ登校してきた。そして顔を見て一言。

「那美、顔がアホになってるよ？」

「誰がアホかな？」

私はやんわりと言いつ返す。朝の挨拶にはあんまりな言葉だけど、いつもは腹の立つこのやり取りが、こんなに嬉しいとは！今日は何度言われても、怒らないでこのやり取りが出来るような気がするよ。

「いや、だから顔がアホになってるってば」

「うるさい！早くカバンを置いてきなよ！」

今日は何度言われても、怒らないでこのやり取りが出来る…ような気がただけで、やっぱり何度も言われると腹が立つ。まったく！朝の挨拶も知らんのか！

「そうそう、その顔、その顔。やっぱりそうでなくっちゃ」

そう言うとき、梢ちゃんは満足そうに笑いながら、カバンを置きに自分の席へ。その後ろ姿を、私が鋭い視線のナイフで貫いていると後ろから、

「よーっす」

と、誰かが挨拶してきた。ご機嫌ナナメの私は、

「おはよう！」

と、梢ちゃんを睨みながらぞんざいに挨拶を返した。

「おお！何だよ：雑な挨拶だな」

こんな気分の方に挨拶してくるからだよ！まったく！それに後ろから挨拶してくるなんて、そっちも失礼じゃ：

「は？後ろ？」

勢いよく振り返る。

誰も居ない席。入学以来ずっと空席のままのはずの席。そこには：

見知らぬ男子生徒が座っていた。

呆然としてみると、男子生徒は怪訝そうな顔をする。

「なんだよ？どっかに何か付いてるのか？」

男子生徒は自分の顔や、服に何か付いてるのかと確かめる。

いやいや、私が気になってるのは服とか顔じゃなくあなたの存在そのものなんだけど？

「あなた、誰？」

私が当然の疑問をその男子生徒に投げかけると、男子生徒は服を確かめているその体勢で一瞬固まり、

「はあ？」

と、またも怪訝そうな顔をして、私を見てきた。

「いや：だから、あなた誰？」

「：なあ美南：そりや確かに、俺とお前はただ席が近いだけでそんなに親しくはないさ。どれどいきなり『あなた、誰？』はないだろ？」

「そうかもね。それで、あなた、誰？」

表情を変えず、何度も聞く私に、男子生徒は呆れたのかな？溜息をつき、頭を掻きながら答えた。

「五十路：いそじたつや五十路竜也だ」

「えっ！あなた五十歳なの？すごい！若い！」

「その五十路じゃねえよ！」

我ながらアホな受け答えだと思う。こんな漫才のようなやり取りをしながら考えた。

五十路竜也？聞いた事もない。

この人物を、学校のどこかで見かけたこともなかった。と、いうことは：

これってちょっとマズクない？向こうは自分のことを知っているのに、自分は向こうのことを知らない。このままだと怪しまれて、病院送り決定？何か適当なことを言って誤魔化さないと…そう思っていると、カバンを置いた梢ちゃんがやって来て、

「あれー？お二人とも、随分仲がよろしいですねー？もしかしてラブラブフラグ立っちゃったとか？いいですねー青春ですねー」

と、ニヤニヤとしながら茶化す。

っていうか、どう見たらそう見えますか？私がこんな素性も知らない奴とラブラブフラグが立つだなんてとんでもない！

と思いつつも、ちょっとはそう見えたかもしれない。梢ちゃんに言われて、私は恥ずかしくなって俯いてしまったから。

そして、この五十路とか言う正体不明のオリジナル人物もちよつと慌てたように、梢ちゃんに言い返した。

「んなわけねーだろ！何で俺が、こんな『しんぶんし』と！」

ピキッ！という音が、私の頭の方から聞こえた。はっきりとね。

『ミナミナミ』と『シンブンシ』。どちらも上から読んでも、下から読んでも同じになる。

というか、バレないように隠してたのに何でこいつはそのことを知ってるんだらう。私の知らないオリジナル人物の癖に、私の知られたくないことを知ってるなんてどういうことよ！

それよりも、今の言葉、あんたは照れ隠しのつもりで言ったのかもしれないけど、五十路君それはまさに地雷なんだよ。

私は、ゆっくりと立ち上がり、にっこりと笑って奴の方を見て、

「誰が『しんぶんし』か！」

そう叫ぶと同時に、殴ってやった。もちろんグーで。見事に奴の頬にクリーンヒット。まるで漫画のようにすっ飛んでゴロゴロと転がっていく。

梢ちゃんは、殴り飛ばしたことに全く動じていない様子で、楽しそうに笑いながら私の顔を覗き込んできた。「那美、顔が鬼の形相になってるよ？」

「当然でしょ！」

怒り心頭の様子私を見て、梢ちゃんはやっぱり笑っていた。

それで、私が殴り飛ばしたあの馬鹿は言うのと、殴られたショックで起き上がることが出来ないようだった。っていうか、一生寝てる！

授業が始まって、後ろから殺気のようなものを感じていた。言うまでもなくそれはあの馬鹿から放たれているものである。

気付かれないようチラッと後ろを見てみると、黙々と消しゴムを小さく千切っている姿が見えた。なるほど。それを私の頭に当てて、地味に仕返ししようってわけね。いいわ、受けて立



つわよ！

私は対抗するために、この馬鹿の殺気の何倍もある殺気のオーラを放ってやるとそれを察知したのか、

「く…くそ…」

と、こいつはすぐごと消しゴムを持った手を引っ込めた。って、弱！

それにしても、誰が『しんぶんし』よ！せめて『トマト』にしてよね！『しんぶんし』じゃまるつきり凹凸がないじゃない！私だってトマトくらいの大きさはあるんだから！

私は授業そっちのけで、ペタペタと自分の胸を確かめる。うん、やっぱりトマトくらいはあ  
る。

その様子を見ていた後ろの馬鹿が、ニヤリと笑い、少し身を乗り出し小声で、

「まない…」

最後の言葉を言い終わる前に、額にシャーペンの先を突き刺してやった。私の胸は台所用品  
じゃない！

「痛ってえ！何しやがる！」

後ろの馬鹿は勢いよく立ち上がり、私に向かって叫び、何事かとクラス中の視線がこちらに  
集まる。全く！どこまで迷惑をかけるのよ！まあいいか。これはこれで都合だ。散々馬鹿に  
してくれたお返しを今ここでしてやるわ。

私は慌てず、騒がず、そして何かに怯えるような素振りをし、静かに手をあげた。

「せ…先生…さつきから五十路君が、私に乱暴を振るおうとしているんです…」

俯きながら、声を震わせて教師に訴えると、睨むような視線が一斉に後ろの馬鹿に集まる。

「こいつ！」と文句を言おうとしたらしいけど、その時にはもう奴の後ろに数学の女性教師が  
笑顔で立っていた。

「五十路？お前は一体何をしようとしていたんだ？」

教師は笑顔で問う。しかしその笑顔は見た者を凍りつかせてしまうほど怖い笑顔。私の知っ  
ている数学の先生そのままだった。怖いけどちょっと安心。

「いっ…いや…俺は何も…」

奴は嫌な汗をダラダラと流しながら、両手を振っている。私はそれを見て肩を震わせながら  
俯いていると、泣いていると誤解したのかクラス全員の睨みがより一層強くなった。私はただ  
笑いを堪えてただけなだけだ。

「五十路…お前とは一回きちんと話をしようと思っていたんだ」

先生は不気味な笑顔をつくり、馬鹿の襟首を掴むと廊下の方へと引きずっていく。皆の視線  
がそちらへ向いているのを確認し、私は引きずられていく間抜けなあいつに向かってべっ！と  
小さく舌を出した。すると何かわめいてたけど、まあどうでもいい。

廊下の方からあいつの叫び声が聞こえてきたが、クラスの誰も気にしない。

数分後、先生が戻ってきて、何事もなかったように授業は再開された。  
ポロポロになった馬鹿を廊下に一人残して：

『魔法世界』とは言っても、数学などの授業内容は普通と変わりはない。担当の先生も同じで安心してただけ、普通とは違う授業があることも気付いていた。

私にとってそれが『魔法世界』での一番の問題かもしれない。

「『魔術』に『魔術理論』か：」

次の時間がその『魔術』の授業だった。私の知っている時間割りではその時間は『体育』のはずなただけ、ここでは『魔術』に入れ替わっている。どうやら『魔術』の時間は体育も兼ねているらしい。どうしたものか：何の対策も練れないまま私は、グラウンドに居る。

そうだ！『体調が悪いから』って、見学させてもらえばいいんだ！そうすれば授業を受けずに済むし、ポロも出さずに済む。

名案（？）を思いつき、早速担当の先生の所へそのことを伝えに行こうとして隣に居た梢ちゃんに腕を掴まれ止められてしまった。

「あれ？那美どこ行くの？もうすぐ授業が始まるよ？」

「あーうん：なんかちよつと急に体調が悪くなってきたから休ませてもらうかと思って：」

「えっ：大丈夫？」

梢ちゃんは一瞬、本当に心配そうな顔をしたがすぐに疑わしい眼差しで私の方を見て、

「んー？今まであんなに元気だったのに、おかしいなあ：」

「い：いやでも：ホントに体調が：」

「さっきクラス中を騙すような名演技を披露した大女優様とは思えないねえ」

バレてるし：

梢ちゃんは私の顔をまじまじと見て一言。

「那美？嘘つきの顔になってるよ？」

「ごめんなさい」

素直に謝った。梢ちゃんに嘘は通用しないと思ったからだ。そんな私を見て苦笑いを浮かべながら梢ちゃんは、

「もう！いくら魔法が使えないからって、ずる休みするのはよくないよ！実技が駄目なら理論の方で取り返せばいいんだしね」

ん：？今、何と仰いました？

「いや、だから魔法が使えないからって、ずる休みするのはよくないよって：」

それを聞いて、私に光明が差し込んだように思えた。そして梢ちゃん、あなたの後ろには後光が差しているのが見えます。あなたは私の救世主です！

どうやら『魔法世界』の私は『魔法を使えない』ということになっているらしい。もちろん

実際に魔法なんてものは使えないわけで、この情報は非常にありがたかった。

私は梢ちゃんの両手を力強く握り締め、心の底から感謝を述べた。

「ありがとう梢ちゃん！私、魔法を使えなくてホントに良かった！」

「いや：魔法が使えないのはあんまり良くないけど：でもやる気になってくれてよかったよ」  
話しているうちにチャイムが鳴り、授業が始まった。今日は男女ともに魔術を使ったサッカーをやるらしい。ボールに魔法をかけて、燃やしたり、それを水や氷の魔法で消して雷の魔法をかけて相手に返したり：これぞ『燃えサッカー』！でも、見る分には楽しそうだけど、魔法の使えない私にとっては、危険極まりないサッカーだ。

それを先生もわかっているらしく、私だけ皆がドツカンドツカンやっているグラウンドから離れ、隅っこで一人特別授業を受けている。まるで、さらし者のようでもっとも恥ずかしい。

「ちなみにこの授業は、小学校一年生並だから。ま、わかっているとと思うけど」

魔術担当の女性教師に皮肉たっぷりに言われ、ますます肩身が狭い。向こうではすごい魔法戦が繰り広げられているというのに、片やこちらは小学一年生。

「絶対に魔法を使えるようになってやる！」

このままでは終われない！私のやる気に火がついた。それはもう、てんぷら油と間違えて、ガソリンを入れたような燃え上がり方だ。先生の言うことを熱心に聞く私はいつもと様子が違うのか、最初戸惑っていたみたいだけど、次第に私のやる気の炎がうつたように先生の指導にも熱がこもってきた。

「とにかく魔法というのは、空間にある魔力を自分の魔力と結びつけて放つの。自分の魔力だけで魔法を放つと、体にもものすごい負担が掛かるからね」

「なるほど：自然エネルギーを味方につけるってことですね？」

「そうよ。それでまず大事なのはイメージよ。体の中に空間の魔力を吸い込むイメージ。火でも氷でも雷でも：自分に使いやすそうなものをイメージするの」

目を閉じ、両手を広げて説明してくれる先生。

「なるほど：仙人が霞を食べるような感じですね？」

「違うわ。それは断じて違うわ。あれはただ食事してるだけじゃない」私のボケた回答にツッコミを入れつつ、「とにかく、目を閉じてイメージよ。自分の周りに小さな火が浮かんでるとイメージしてみなさい」

うーん：でも、私としては仙人が霞を食べるイメージが、一番しっくり来るんだけど：というか、この世界でも仙人って通じるんだね。もしかしてホントに居るとか？

でもまあ、とりあえず先生に言われた通り、目を閉じて小さな火が浮かんでるイメージを浮かべてみた。次々先生から指示が飛んでくる。小さな火がどんどん増えてくるイメージ。その火が集まって、徐々に大きくなっていくイメージ。その火が自分の中へ入ってくるイメージ。

「そして最後にその火が自分の中の魔力と合わさって：」

そこまで言ったところで：

ビュン！

と言う風を切る音とともに、自分の顔の前を何か物凄い勢いで通り過ぎて行ったのを感じた。目を閉じていた私は、何が通ったのかわからなかったが、先生の視線を追いかけて、その先にあるものを見て血の気が引いた。そこにカツチカチに凍ったサッカーボールが転がっていたからだ。そのサッカーボールを拾って、叩いてみた。もの凄く硬い。シャレにゃないよ。

「男子！気をつけなさい！頭に当たったら死んでたわよ！」

「すみません。急にコントロールを失って…」

ボールを取りに来た男子が、脳天気すぎてムカツとする。

「ん？この声は…」

振り返ると、そこにはあの馬鹿、五十路竜也がいて、私の顔を見るなりあからさまに嫌そうな表情をしてきたので、私も同じように嫌そうな顔をしてやった。まったく、こいつは何か私に恨みでもあるの？それとも、好きな女の子に意地悪するって言うあれ？出来れば後者でお願いします…って言いたいところだけど、こいつ相手だと一ミリもそんな感情沸いてこない。

「あんた…まさかわざと狙ったとか…？」

「そんなわけあるか！そもそもボールを蹴ったのは俺じゃねーし。まあボールが飛んでった時心の中でちよつと『当たれー』なんて思っただけだ」

ピキッ！とサッカーボールの氷の割れる音がした。

「それよりお前も早く、魔法が使えるようになるといいな。小学一年生」

朝の仕返しとばかりに、憎まれ口をたたく。

ピキキッ！とまたもや氷の割れる音がした。

私は、無言で馬鹿に近付き、

持っていた、カチカチのサッカーボールで側頭部を殴打。

ごめんね五十路君、わざとじゃナインダヨ？ただちよつと手元が狂っちゃったみたい。それか、サッカーボールがあんたのこと嫌ってたのかもしれないね。

って、さすがにそれは苦しいか…先生がこつちをを見る…よしここは…

「せつ…先生！私、ボールを投げかえしたら五十路君の頭に当たっちゃいました！」

これはさすがにわざとらしかったかな？なんて思っていると、先生は、

「心配しなくても大丈夫よ。体操服には魔法の威力を和らげる効果があるから」

へえ、この体操服にはそんな効果があったんだ。なるほど、だから皆全力で魔法を使いまくってるわけね。グラウンドでドカドカやってるのを見てみると、確かに体操服に当たった魔法は全部とはいかないまでも、結構消えてるね。

ところで、私のしたことを先生は黙認してくれるらしい。この先生も今のあいつの態度に立腹していたのだろう。それか、自分の目の前にあんな凶器を飛ばした男子に怒っていたのかも知らない。代表して罰を受けるとは五十路君、君も酔狂だね。

ちなみに、体操服で防衛されるのは『首から下』だけらしい。

その後、何事もなかったように授業は再開された。倒れた馬鹿を放置したまま。

結局魔法は使えなかった：残念。

昼休み。私は梢ちゃんと二人で中庭に来ていた。

「それにしても五十路の奴しぶといね。あんなカチカチの凶器で頭殴られたのにもう復活してんだから。しぶとさからしたら、ゴキちゃん並だね」

別に復活しなくても良かったのに：

とは言うものの、ちよつとホツとしていた。もしこのまま起きなかったとしたら私どう責任を取ればいいんだろう、なんてことを授業を受けながら考えてたからね。まあそのせいで魔法が使えなかったと言っても過言ではないでしょう。あとであの馬鹿に抗議してやる。

「おやおや？安心したような顔になってるよ？どうしたのかな？」

「もう！人の顔を覗き込まないで！それよりお弁当食べようよ」

「そだね」

私達は同時に弁当箱の蓋を開けた。

うわ！何ですかこのお弁当。ご飯の上にそばろと海苔でクマの絵が描かれ、おかずもなんかいちいちキャラクターっぽく作ってる。気合を入れて作るのはいいけど、こんなお弁当を喜ぶのは小学校低学年までだよお母さん：もうちよつと気を使って：恥ずかしいよ。

でも、私のお弁当を見て梢ちゃんは目を輝かせていた。

「うわ！那美のお弁当やっぱり凝ってるね？！いいいな？」

こんな幼稚園弁当のどこがいいんだか。

「いい加減、この子供っぽいお弁当やめてって言うてるんだけどね：お母さんがヤダって

言うもんだからずっとこのままなんだよね：」

「いいじゃない！うちなんか殆ど前の日の余り物と、冷凍食品なんだから！」

そっちの方が断然いいよ。何ならお弁当作りを梢ちゃんのお母さんに入れ替えてほしいくらいだよ。それに梢ちゃん、あなたのお弁当もなかなかの物だよ？前日の余り物には一手間加えてあるっぽいし、冷凍食品のエビフライにも、梢ちゃんのお母さん特製のタルタルソースがかかってるじゃない。結構手間をかけて作ってくれてると思うよ？

人は往々にして親の愛情に気付かないもんだね。

私達はいくつかのおかずをそれぞれ交換して、食べ始めた。

「こうして二人でお弁当を食べ初めてもう二ヶ月近くなるんだね」

「そだねーうおっ！那美の卵焼き、めっちゃうまい！」

「もう何度も食べてるじゃない。それより梢ちゃんのこのコロッケすごくおいしいよ！」

「ああそれ昨日の肉じゃがの余りだね。私は『無理やりコロッケ』と呼んでいる」

交換した他のおかずも頬張り、箸を揺らしながら説明してくれる。説明してくれるのはいいんだけど、口の中に物を入れて喋っちゃ行儀悪いよ。あ、ほら！口の周りにいっぱい物がくっついてる！

私は、梢ちゃんの口の周りをティッシュで拭いてあげながら、

「私、梢ちゃんに会えてホントによかった」

真面目な顔をして梢ちゃんを見る。

「なんだよ急にー！改まって言われると恥ずかしくなるよ」

少し顔を赤くして、箸をふりふり、照れくさそうに梢ちゃんは笑う。

「私だって良かったって思ってるよ。そう言えば那美ってば最初に私に話しかけてきた時ちよつとビクビクおどおどしてたよねー」

梢ちゃんは私の頭をくしゃくしゃと撫でながら楽しそうに話す。

「え：私、最初そんな風に見えた？」

「うん、見えた。小動物みたいで可愛かったなー」

私にそういう自覚はなかったけど、そう見えたのなら本当だろうとも思った。何でそんな風にしてしまったのか思い当たることもある。

小学校に入学する前、すごく仲の良かった友達が居た。だけどその子は突然、別れも告げずに引越してしまい、まあ子供心に傷ついたのかもしれない。私は数日間部屋にこもって泣いていた。

そんなことがあったからか、小学校に入学しても友達を作ろうとしなかった。友達になつて、どうせまた何も言わずにどっか行っちゃうんだから：とかどこかで思ってたからだ。そんな状態が小学校を卒業するまで続いたっけ。

中学生になって、引越していく子なんてそんなに多くないんだなってわかったから、クラスメイトとも少しは話をした。だけどまだちよつと疑ってたし、友達と呼べるほど仲良くなつた子は居なかったんだけど、中学三年の時に初めて出来たんだよ、友達が。それが相沢友美ちゃんだった。だけど友美ちゃんは放課後は生徒会で、私は帰宅部。あんまり遊ぶことが出来なくて、結局中学時代は結構寂しかった。

「それで、本格的にこれじゃダメだって思って、高校に入学した時に声をかけたのが：」

「なるほど！この私だったわけね！」

梢ちゃんは誇らしげに胸を張る。

「うん。梢ちゃんのお陰でクラスの皆とも仲良くなれたし、すっごく感謝してるんだ。ありがとう梢ちゃん」

「にゃー！かわいいやつめー」

梢ちゃんは勢いよく抱きついてきて、頭をまったくしゃくしゃくと撫でる。

私の顔は梢ちゃんの胸の中。男子生徒の諸君、羨ましかろう！とか叫んでみたかったけど、力強く抱かれて、口が塞がってるので喋れない。…って言うか梢ちゃん、苦しい！どれだけ力が強いのか！私が離れようとしても全くびくともしない。頭がボーっとしてくる。それにしてもいいねこの胸。そしてずるいね、このフカフカ。半分ほしい…って何考えてんの！ヤバイ！窒息する！

走馬灯が現れようかというその瀬戸際、もの凄い突風が吹き、梢ちゃんがよるめいている間に辛くも脱出できた。どうやらどこからともなく飛んできたメロンパンが梢ちゃんの顔に直撃したらしい。メロンパンに命を救われた。メロンパン様々だね、まったたく。

「あー苦しかった…」

「あはは、ごめんごめん。にしてもなんでメロンパンが飛んでくるかな？まあいいか。それよりお弁当食べちゃおう。その後は食後のデザートだ！」

梢ちゃんはメロンパンを高々と掲げ、私にも分けてあげようなんて言ってたけど、お弁当だけでお腹は一杯だし、ましてやどこから飛んできたのかもわからないメロンパンなんて食べる気にもならなかったので、断固拒否した。

それにしても一つ勉強になったね。『過度の愛情表現は凶器になる』。うん、私の胸が大きくなった時のために覚えておこう。

抱きつき攻撃で、少し崩れたお弁当を食べ終えたあと、ぼんやりと空を眺めていた。

『魔法世界』の空は、普通の世界の空よりも澄んでいるみたい。排気ガスを出す車が走っていないからかもしれない。心なしか空気もおいしいように感じるし。朝にあれだけいた巨大な鳥も、今は飛んでいない。

ところで梢ちゃん、そんなメロンパンをモリモリ食べて大丈夫？お腹壊しても知らないよ？そうだ：梢ちゃんには言っといた方がいいかな：私は別の世界からこの世界に飛ばされちゃったってこと：私はこの世界の人間じゃないってこと：…きっと信じてくれないだろうけど…

「もあみ？あおあもいえみあつふえうお？」

「梢ちゃん：口の中の物を飲み込んでから喋ろうね？」

梢ちゃんは私の言った通り、飲み込んだあと改めて、

「那美？顔が真面目になってるよ？」

「うん：私、実は梢ちゃんに言っておきたいことがあって…」

「私に愛の告白？」

「うん：私、実は梢ちゃんのことを：って！そうじゃなくて！」

梢ちゃんは私の肩を叩いて大爆笑している。話の腰を折られ、あらぬことを言わせれそうになつて、私は顔を真っ赤にして猛抗議する。

ひとしきり笑つて、ひとしきり抗議したところで、本題に戻そうしたけど：やめた。

特に理由は無い。ただ何となく。こんなこと、いつでも言えるしね。

昼休み明けの授業は『魔術理論』だった。その内容は『効果的な魔法陣の配置と、空間利用法』。空間利用法？これだ！何だか今の私にすつごく必要な授業のような気がする。もしかしたら〈元の世界〉に戻るためのヒントが見つかるかもしれない。

よくわからない用語が出てきたりもしたが、何とか理解しようと頑張り、そしてホントによくわかった。

この授業で〈元の世界〉に戻る参考になるようなことは一つも無かつたってことが。

無駄な努力をした時ほど、空しいものはない。今私の心には寒風が吹きすさんでいるよ。心が寒い：

「空間利用法って言うから、ちょっとは期待したんだけど：結界とか魔法陣を使った落とし穴の作り方とか教わってもねえ：」

それにしても、お昼を過ぎて急に暑くなってきた。心に吹く寒風で体も涼しくならないものかな。

頬杖をつき、もう片方の手で下敷きを団扇代わりに扇ぎ、窓の外を見てそんなことをブツブツと言っていると梢ちゃんがやってきた。

「どしたの那美？」

「んー？ちよつとねー：暑いし心の寒風で涼しくならないかと：じゃなくて、落とし穴の作り方とかじゃなく、空間移動する方法を教えてほしかったな：って：」

「そんなの高校で習うわけ無いじゃん」梢ちゃんはあつさり言いのけ、「大体、空間移動ってのはすつごく難しいんだから。世界でも数えるほどしか空間移動できる人は居ないんだよ？」

え？そうなの？私の考えでは、〈元の世界〉に戻るためには空間を移動しなきゃいけないってことになつてるんだけど：計画が狂つちゃうな：

「なんだお前。空間移動に興味があんのか？」

口を挟んできたのはあの馬鹿だ。なんでここであんたがしゃしゃり出てくるかな？

「おいおい睨むなよ！折角情報をやろうつてのに」

「くだらない情報だったら、女子スク水を着て校庭一周ね」

「なんだよ！その人生が社会的に終わりそうな罰ゲームは！まあいい。これは絶対の自信があるから」



「聞かせてもらおうじゃないの」

「どっかの会社が空間移動を出来る装置を開発して、もうすぐ実用化に向けた実験が始まるらしいぞ？それが出来れば、誰でも空間移動が出来るそうさ。空間移動は人類の夢だからな。早く実用化してくれればいいんだけどな」

得意気に、そして少しわくわくしたような感じで情報を提供してくれた。

はたしてこの馬鹿がこんなに輝いて見えたことがいまだかつてあっただろうか。いや絶対にない。今日出会ったばかりだから。そんなことはともかく、何とも有益な情報を持って来てくれたものだ。これで〈元の世界〉に一步近づいたんじゃないだろうか。

私はこの有益な馬鹿の両肩をガツシリと掴んで一言。

「五十路君！あんたもたまには役に立つ！」

放課後。

私は梢ちゃんと一緒に帰ろうと言われたが断って、ある場所に向かった。

それは、『科学部』の部室。

『消しゴム野球部』は『消える野球部』に、『萌えサッカー部』は『燃えサッカー部』に、そして『囲碁卓球部』は、『囲碁卓球部』のままだった。

果たして『科学部』は『科学部』のままなのか。それとも別のクラブに変わっているのか。

「出来れば科学部は科学部のまま残ってほしいけど……」

結論から言うと、そのどちらでもなかった。

部室はもぬけの殻で、『生徒達の唯一の良心』と呼ばれた『科学部』は、存在しなかった。数々のへんてこクラブは残ってるくせに、『科学部』が無いとはこれいかに。

でも予想はしてたけどね。『魔法』と『科学』は相反するもので、『魔法世界』では『科学』というものは、迷信のようなもの……というのを、子供の頃何かの本で呼んだ覚えがあったから。「でもせめて、何かのクラブと入れ替わってほしかったな……」

私は、『科学部』の看板があったであろうその場所を溜息をついてしばらく間見上げ、そして帰路についた。

帰り道、あいつが言っていた空間移動装置のことを考えていた。

空間移動装置で、〈元の世界〉に戻れるという確証は無いけど、自力で空間移動できないとわかった今、それが最後の頼みの綱だった。だけど、問題はまずどうやってその装置を使わせて貰うかだ。一介の高校生である私にその会社とのコネがあるはずも無いし、いきなり行ってちよつと使わせてね、と言うわけにもいかないだろうし。やっぱりここは、こっそり忍び込んでちよつとびり拝借するのが手っ取り早いかな……

「ん？忍び込む……どこへ……？」

そうだ、私はまだ肝心なことを知らない。

「そもそも、その装置を作ったのは、なんて会社？」

基本的なことでもっとも大事なことを失念していた。頼むにしても忍び込むにしても、その装置を開発したって言う会社がどこにあるかわからなくちゃ話にもならない。

よし、ケータイで調べてみるか。…って、『魔法世界』にもケータイってあるの？何て思ったけど、鞆の中にちゃんと入っていた。

「ああ、そう言えば朝自分で入れたっけ」

言いながら早速ケータイをネットへ繋ぐと、見慣れない画面が表示された。『マグネットへようこそ』。マグネット？聞いたこと無いな。磁石のこと？

『マグネット』とは、『魔法世界』のネットワークサービス『マジカル・グローバル・ネットワーク』の略称で、通話もこのマグネットを介して行われる。

『魔法世界』のケータイは『電話』では無く『念話』、つまりテレパシーで、いつでもどこでも、誰とでも、自分の魔法とは関係なしに念話出来るようにと開発されたのが携帯で、その念話を傍受されないように暗号化するために構築されたのが『マグネット』である。

『マグネットの歴史』と書かれたリンクをクリックして得られた情報をまとめると、そういうことになる。今の私には何の関係もないけども。

そんなことよりも今は空間移動装置を開発した会社を調べなきゃ。その会社が近くにあったらいいんだけど、遠かったらどうしよう…お小遣いは殆ど使っちゃったし…バイト探さなきゃいけないかな？

「『空間移動』に『会社』…と」

検索フォームに入力し、0.5秒程して検索結果が表示された。

「うわ！すごい！『リゼイン社』って名前がズラッと出てる！きつとこれに間違いないね…！でもリゼイン社…？どこかで聞いたような気が…」

思い出そうとしたが、「ま、いいか」とすぐに諦め、リゼイン社のホームページにアクセスしてみる。すると画面から映像が飛び出し、メニューが立体表示された。

「なにこれ？すごい！私のケータイってこんな機能付いてたっけ？」

ケータイをいろんな方向へ傾け、立体映像を見てみる。横から見ると薄っぺらく、後ろから見ると文字が見えない。なるほど、ボタンの裏側ってことか。なかなか芸が細かい。しかし、見たことの無い技術を見ると、妙な感動を覚えるものだ。

「と、こんなことしてる場合じゃない。えっと…空間移動に関することは…これか」

メニューの中に『空間移動装置』というボタンがあり、立体表示されているそのボタンに指を触れると映像が切り替わり、その開発された空間移動装置が表示された。もちろん立体。

それは円筒形で、何の飾り気も無いシンプルな物だった。下の方に表示される説明には、直径一メートル、高さ四メートルと書いてあり、装置正面に付いた扉から中に入り使う物のよ

うだ。腕とかにはめて使うものだと思っただけだ……これじゃあ忍び込んでこっそり拝借することは難しそうだ。

「……まあしかたないか……とりあえずこの会社の場所を調べて……」

一つ前の画面に戻り、『会社概要』というボタンを押すと、会社の住所と最寄り駅の情報が表示された。それによるとリゼイン社は私の家から電車で二駅ほどの所で、バイトをしなきゃ行けない程遠く無い。とりあえずバイト探しは延期してもよさそうだ。

「よし、じゃあ次の休みの日にでも行ってみよう。それまでなるべくボロを出さないように気を付けないとね」 ケータイをしまい、顔を上げると前方の塀に描いてある落書きが目に入った。まったく人の家の塀に落書きだなんて、私の家の近所にもそんな悪ガキが居たんだね。見つけたら懇々と説教してあげなきゃ。こう見えても私、高校に入ってから近所の子供達に一目置かれる存在になってるんだから。私の言うことなら多分素直に聞くでしょう。

それにしても、よっぽど調子に乗ったのかあつちこつちに描いてある。……でもこの落書きどつかで見たことあるような……

「ああそうだ！これって魔法陣だ。なんでこんなに描いてあるのかな？魔除け？」

ん……？おかしいな……朝私は、辺りを警戒しながら学校へ向かった。それはもう通報されてもおかしくない、挙動不審な怪しい人物のごとく、見回していた。そして気付いたことは、

『あの鳥以外に非常識なものはない』ということ。

つまり、学校へ行くときにはこんな魔法陣は描かれていなかったのだ。魔除けの魔法陣なら消す必要は無い。朝だけ消すというのも合理的ではない。

嫌な感じがする。

私は辺りを見回した。誰も居ない。風もない。音もしない。あるのはただ静寂だけ。

「あ……れ……？これって……すっごくヤバイんじゃない？」

顔が強張り、血の気が引いていく。なんだか気温も下がったように感じる。

次第に辺りが薄暗くなっていき、空も、町並みも、すべてが闇に染まった。

街灯がつき、私をスポットライトのように照らした……

その刹那――――

ドオン！という轟音が後ろから響き渡った。振り返ると民家の中から全長四メートルはあるうかという巨大な鳥賊の化け物が現れ私の方を見ていたが、どう見ても友達になれそうに無い。

「うわあああああつ！」

そういうわけで、握手など求めず、全力でその場から逃げ出した。鳥賊は私を追ってくる。

何で追いかけてくるの？私を食べたっておいしくないよ！

「なんなの！なんなの？つ？何で私があんな化け物に狙われなきゃいけないの？」

烏賊は私を捕まえようと触手を伸ばしてきた。私は何とかそれを避けると烏賊の触手はそのまま民家の壁に突っ込み、そして破壊してしまった。

「あんなのに捕まったら絶対死ぬ！」

辺りの物を薙ぎ倒しながら烏賊が迫ってくる。

しかし、キツイ。最初から飛ばすとバテるのも早い。このままでは確実に捕まってしまう。

そうだ、そう言えばこの先は丁字路だ。それを利用すれば！

私は力を振り絞り丁字路までダッシュ。ギリギリまで走って行って、素早く右へ曲がると、追いかけてきた烏賊は曲がりきれず、勢い余ってそのまま民家に激突した。民家は崩壊し粉塵が巻き上がる。賠償金は烏賊に請求して下さいよ。私は一切関知しておりませんので！

「けほっけほっ…よ…よし…今の内に…」

近くの民家の庭に駆け込み、烏賊に見つからないよう塀の側で身を屈めた。

「はあ…はあ…とりあえず…体力を回復させて…化け物がどこかに行くまで…ここで…」

息を切らしながら、塀に入った亀裂の間から烏賊の様子を窺う。奴は気を失っているのか突っ込んだ体勢のまま動かない。よし、その間にこの状況のことを整理しよう。

「これって…結界…？そうだ…今日の授業で言ってた…空間の一部をコピーして人を閉じ込める結界だ…魔法陣も全く同じだし…何で気付かなかったの…」

そして、一体誰が何のために私をこんな所に閉じ込めたのか。私は魔法も使えない人畜無害女子高生だよ？家だってそんなに蓄えがあるわけじゃない普通の一般家庭なんだから誘拐するメリットだって無いし、ましてや命を狙われる覚えなんて全く全然欠片も無い。

ガラガラと音がした。烏賊の目が覚めたようだ。でもここは烏賊の位置から死角になっていて気付かれてはいない。烏賊はキョロキョロと辺りを見回し私を探している。

「ああ…私はいませんよー探しても無駄ですよー…だから早くどっか行ってよー」

私は天に祈った。神様ー仏様ーお天道様ー…どうか助けてくださいー…すると烏賊はこちらとは反対の方向を向いて移動…：せず、触手を振るいながら反転してきた。

「いやあああ！」

祈りは届かなかった。神様と仏様はともかく、ここにはお天道様がいなかったんだ。

触手は頭の上すれすれの所を通り抜け、塀や建物を吹き飛ばしていく。壊された塀の破片が当たって、腕や足から所々血が出ている。

塀が壊されたことで烏賊に見つかってしまい、強制マラソンが再開。

「あああーっ！出口はどこー！どうやったら出られるのー？何で授業では脱出方法を教えてくれなかったのーっ！」

脱出方法を教えてくれなかった魔術理論の先生、恨むよ！

私は逃げるが、烏賊はどんどんと追い詰めてくる。大して休むことも出来なかったのもう  
ふらふらだ。これは覚悟を決めて、烏賊の友達になるか、ご飯になるしかないか。

と、進行方向に誰かが立っている。女の子みたいだけど…まさかこの烏賊を操ってる敵？

「は…挟み撃ち…？」

人間どうしようもなくなって諦めると全身の力が抜けるみたいで、私はヘタヘタとその場に  
倒れ込む。後ろからは烏賊が迫ってくる。前方の女の子は手に氷の矢を作り出し投げる体勢に  
入っている。もうだめだ…

女の子は氷の矢をもつ凄スピードで投げ放った。その矢は私の方に飛んできて、そして頭  
の上を通り越して追いかけてきた烏賊の頭に突き刺さった。烏賊は触手を振り上げた状態で私  
の手前で止まり、地響きを轟かせながら後ろに倒れた。

「あ…れ…？助かった…の？」

体を起こし、その場に座って、倒れた烏賊を見て呆然としてみると、

「ミナミナミ」

女の子が不意に私の名前を呼んだ。いきなり名前を呼ばれるとビクツとするね。

振り向いてその子を見てみると、私よりも頭ひとつ分くらい背が低く、綺麗な黒髪が背中  
真ん中辺りまで伸びている、中学生にも見える女の子だった。でも私と同じ制服を着ているの  
で、同じ学校の生徒みたいだけど、こんな子いたかな？見覚えないけど…まさか年上？

「あなた誰…？なんで私のことを知ってるの？」

不審な目で見ながら尋ねると彼女は、

「私は、四季彩花<sup>しきさいか</sup>。靴下を左右違うものを履いているからといって、怪しいものではない」

「は…？」

突拍子も無いことを言われると、どのように反応をしたらいいのかわからないので困る。見  
てみると確かに四季彩花と名乗った彼女の靴下は、右が普通の長さ、左が膝上まである長さだ  
った。何でそんな格好してるの？気にならないかと言われれば、気にはなる。

「これには深い理由がある」何も聞かないのに答えた。「朝出かける前にダンスを見てみ  
ると、なぜか長さの違う物しか入っていなかった。私はなぜこんな事態になっているのかを考  
え、そして気付い…」

「いや、聞いてないし！」

訳のわからないことを言う四季彩花さんの発言をバツサリと斬り捨て、私はゆっくり立ち上  
がり本題へ戻す。「なんであなたは私のことを知ってるの？私あなたと会ったこともないけど？」

「あなた怪我してる」

四季さんは私の腕や足の傷見つけ、自分のカバンからキャラクターの絵が描かれたかわいい

絆創膏を取り出し、患部に貼ってくれた。

「あ：ありがとう」四季さんって結構いい人だね：「って！そうじゃなくて！私の質問にまだ答えてもらってないんですけど？」

「あなた、魔法を使ってみたいと思ってる？」

「ぐっ…！またスルーですか…まあいいわ…そりゃあ、使えるものなら使ってみたいと思うけど…今の私にはまだ…」

「じゃあ…はい」

そう言っただけでポケットから取り出し渡されたのは百円で売っていいようなライターだった。そりゃあね、これを使えば誰だって火をつけることは出来ますけどね…

「あの…もしかしなくても私を馬鹿にしてる？こんなの魔法でも何でもないじゃない！」

ワナワナと震えながら、四季さんにライターを突き返す：そうとして、もう一度ライターを見た。何の変哲もないガスのライター。だが、何か違和感を覚えた。

「ねえ、四季…さん？このライターどこで買ったの…？」

「この世界にライターというものは存在しない」四季さんは淡々と答える。「なぜならこの世界の人間は皆、小さな火位ならライターを使わずとも作り出せるから」

「ちよつと待って！じゃあ何で存在しないはずのライターがここにあるの？」

「それは私が作った物。この世界ではただ一つだけのレア物。プレミアが付くかも」

正直言っただけで驚きを隠せなかった。作った？どうやって？見たこともない未知の物を…頭の中であれこれ考えて、そして一つの仮説が成り立った。

「あなたもしかして…〈元の世界〉の人…？」

「違う。私は『魔法世界』の人間」

仮説はあっさり否定された。

「ここでああなたの最初の質問。どうして私はあなたのことを知っているか。確かにあなたは不思議に思いかもしれない。だけど『魔法世界のあなた』と私が知り合ってたとしても何も不思議なことはない」

「言われてみれば、確かに…じゃあ四季さんは、この世界の私と知り合いなんだ？」

「会ったことはない」

「ないんかい！」

私は転びそうになりながらも、鋭くツツコンだ。

「私がああなたを知っているのはもつと別の理由。私は〈元の世界〉と一方的なリンクを結んでいて、向こうの世界のことを知ることが出来る。そのライターも向こうの情報を元にこちらにあるもので生成した。この能力は世界でも私だけにしかない秘密の力。誰かに知られるとマズイことになる」

「私に思いつき秘密を暴露してるけどそれはいいの？」

四季さんは、あ…といった表情を浮かべて、慌ててカバンの中から紐の付いた五円玉を取り出し、背伸びして私の顔の前で揺らし始めた。あ…まさかとは思うけど…

「あなたは今のことを忘れるー忘れるー」

「忘れるか！」

そんな素人催眠術で今聞いたことを忘れるほど、私のノーミソは劣化してませんよ。だけど四季さんは、今の催眠術で本気で忘れさせることが出来ると思っていたらしく、私が催眠術にかかっていないとわかってシユンとして俯いてしまった。これじゃ私が悪いみたいじゃない。

「はあ…まあ、秘密にしたいなら私も黙っておくけど…その代わり、知ってることがあったら教えて」

「わかった。知っていることなら話す。何でも聞いて」

四季さんは五円玉を私に手渡しながら答えた。いや、渡されても…

「…まあいいか…それより…なんで私は『魔法世界』に飛ばされちゃったの？そのことについて何か知ってる？」

「なぜあなたは『魔法世界』に飛ばされた」と断言できる？」

また訳のわからないことを言い出した。

「いや…だから…ここは『魔法世界』でしょ？それで私は『魔法世界』の住人じゃない。ってことは飛ばされたとしたか考えられないじゃない」

「もう一つの可能性、『元の世界そのものが魔法世界になった』というものがある」

「あ…そう言われればそうかも…でもそれって重要なこと？」

「とても重要。あなたの言った可能性と私の言った可能性では、同じ『魔法世界』であっても元の世界に戻るためのプロセスが違ってくる。間違った方の可能性で考えていたら一生戻る方法は見つからない」

言葉が出なかった。四季さんの言った可能性のことなど全く一ミリも考えてなかった。もしそっちの可能性だとしたら、どうなるんだろう。頼みの綱である空間移動装置では〈元の世界〉に戻ることは出来ないってことになるんだから…世界が変わった原因を突き止めなきゃいけない…あれ？世界が変わった原因って何だろう？あれ？だったら〈元の世界〉に戻るのムリじゃない？あ、詰んだ…

私の中に絶望感が広がっていく。そんな私に四季さんが一言、

「でも、まあ実際はあなたの言った方が正解だけど」

四季さんの言葉でその場にへたり込んだ。安堵と呆れで力が抜けたのだ。

「あの…人をあんまり不安にさせないでくれる…？」

「ごめんなさい。でも今私は反抗期。ちょっぴり楯突いてみたくなる年頃…」

この子と話していると、ホントに疲れる。話を本題に戻してくれる？

「あなたがなぜ『魔法世界』に飛ばされたか。それはただ巻き込まただけ」

「巻き込まれた？何に？」

「時空ホール。〈元の世界〉と、『魔法世界』を繋ぐゲートのようなもの。それが昨日この街に単発的に発生した。あなたはそれに巻き込まれた」

「え…何でそんなものに巻き込まれたの？」

四季さんは、ん…と考えるような仕草をして、

「日頃の行いが悪いから？」

「…叩くよ？」

ライターを持った左手をグッと握り締め、突き上げた。

「今のは冗談。暴力反対。あなたはただ運が悪かった。そう思っていてくれればいい」

「運が悪かった…確かにそうかもね…じゃあ、どうやったら戻れるかわかる？」

「……………」四季さんは俯いて黙り、「戻るには時空ホールを発生させなければいけない。だけどそれはとても危険なこと。時空ホールが大きくなりすぎると、〈元の世界〉も『魔法世界』も無事では済まない。小規模な時空ホールを作り出し、それをコントロールする技術が必要になってくる」

「リゼイン社が開発したって言う空間移動装置を使うことは出来ないの？」

「わからない。私はその装置を見たことがないから。だけど可能性はある。時空ホールも元々は空間の歪みから発生する。空間移動も空間を歪めて実行するから」

「なるほど…やっぱりリゼイン社には行ってみる価値がありそうだね。ありがとう。参考になったよ。あ、それから、『魔法世界の私』ってどこに行っちゃったの？もしかして私と入れ替わりで〈元の世界〉に行っちゃったとか？」

「それは…あ、もう時間切れ」

時間切れ？延長をお願いしたい。まだ聞きたいことが山ほどあるんだから。だけどそう言えば、さっきからパキパキと何か割れるような音がしてるね。何か破片みたいなのも降ってるし。何だろうと思つて上を見てみると、パキパキと音を立てて次々空間にヒビが入っていき、そして、パリンという音とともに境界は消え去った。境界の欠片が光になってパラパラと降り注ぐ。同時に太陽の光も降り注ぎ、今まで暗かったから少し眩しい。

辺りを見回してみると、何もかもが元に戻り、鳥賊に壊された家も、何事もなかったようにそこに建っている。

「じゃあこれで」

「あ！ちよつと待ってよ！」

「大丈夫。また学校で会える」

そう言い残すと四季さんは帰って行った。

何者なんだろうあの子。何であんなに事情に詳しいの？…まるで全部を知ってるみたい…

「あ…ライターと五円玉…」



まあいいか、明日学校で返そう。

あれ…そう言えば四季さん…なんで結界の中に居たんだろ…？

振り返るとそこにはもう四季さんの姿はなかった。